

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
主任部長	大西 亨
部 長 兼内視鏡センター長	高谷 宏樹
医 長	山原 邦浩
副医長	中野 智景
非常勤医師	黒木 恵美

＜肝臓内科分野＞

—概要—

当院は日本消化器病学会認定施設であり、大阪府における肝炎専門医療機関である。

当科は常勤医4名であるが、日本消化器病指導医2名、日本消化器病専門医2名、日本消化器内視鏡学会指導医2名、日本肝臓学会専門医2名を含む。

非常勤医師は1名のみで週一日外来を担当してもらっている。また、大阪府肝炎医療コーディネーターを1名設置し、肝炎治療に対応している。

当科の対象疾患としては急性・慢性肝炎、肝硬変、肝がん、胆膵部門としては膵がん、膵のう胞性疾患、急性・慢性膵炎、総胆管結石、胆のう炎、胆管結石である。

人事面では2021年4月より山原医師が加入し、内視鏡と肝臓両面の専門医として幅広い疾患に対応してくれている。

—実績—

内視鏡件数等詳細は内視鏡センターでの記述に譲る。

経皮的肝胆道系の処置数は18件であった。

肝疾患内訳に関しては、

B型肝炎	76名
C型肝炎	37名
PBC	20名
自己免疫性肝炎	14名
Overlap syndrome	5名

等の外来follow upや新規肝障害紹介患者の精査、アルコール性肝疾患、各種肝硬変患者などのマネジメントを行っている。また院内で測定した肝炎ウイルス陽性の患者は全員把握しており、全ての患者がもれなく精査、治療の機会を得られるよう鋭意努力している。

—今年度の成果と反省点—

2021年9月より内視鏡センターが完全リフォームを終え、3診体制となり診療体制の充実が図れた。

地域中核病院として新規肝障害患者の受け入れも積極的に行い、薬剤性肝障害、自己免疫疾患による肝障害や原因不明の肝障害患者の精査、加療などを行った。また、他科からの肝腫瘍破裂後患者の治療やEICU管理重症肝不全患者の診療補助を行った。

—来年度への抱負—

C型肝炎患者においても直接作用型高ウイルス製剤

が使用できるようになり、効果が期待できる。また肝細胞癌においても免疫チェックポイント製剤による治療が標準化してきており、手術不能症例でも治療の幅を広げていきたい。

＜消化管・胆膵分野＞

—概要—

消化器内科(消化管・胆膵グループ)では内視鏡を用いた検査、治療と消化器良性疾患、炎症性腸疾患、胆膵悪性疾患のがん化学療法を含めた治療を行っている。当科は日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会の認定指導施設であり、当院で研鑽を積むことでそれぞれの専門医の取得が可能である。2021年度は消化器病専門医、消化器内視鏡学会専門医の山原医師が入職し、より幅広くたくさんの方の外来患者、入院患者の診療が行えた。さらに、夜間と休日の緊急処置も多く行えるようになった。

また、新消化器内視鏡センターもオープンすることが出来、機器、ファイリングシステム、洗浄装置も更新され検査の質、量ともに向上した。

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、医師、看護師は検査ではfull PPE、N95マスクの装着を徹底し、内視鏡検査でのウイルス感染症の予防を徹底した。

また、救急かつ重症の消化器患者の診療に関しては救命診療科と密に連携して救命率の向上が行えている。

—実績—

消化器内視鏡センターの業績は内視鏡センターのページを参照していただきたい。

内視鏡治療以外の入院は急性胃腸炎、イレウス、大腸憩室炎、潰瘍性大腸炎やクローン病、胆膵の進行がんに対する抗がん剤投与などの疾患であるが、そのうちの半数以上は緊急入院患者であった。

外来診療においても紹介患者数も順調に増加している。

—今年度の成果と反省点—

新型コロナウイルス感染症が蔓延している中でも内視鏡検査業務、患者の診療業務で感染するスタッフはいなかった。入院患者総数は減少したが、大腸ポリープ切除を外来で行うことが多くなったのも関係すると思われる。内視鏡検査数、消化器内科入院患者数も大きく減少することもなく運営が行えている。

—来年度への抱負—

やはり、患者数に対して医師の数が圧倒的に少ない現状が続いている。今後の継続した消化器内科診療のためには若手の採用が望まれる。

今後は、スタッフ各々が研鑽に努め、地域の消化器疾患を持つ患者に継続的に安心して医療を提供できるようにしていきたい。